

死後の世界が教える

「人生はなんのためにあるのか」

第十二章 生の選択

(188)

魂が再びスピリットの世界の聖域を離れて、この世への旅に出発しなければならぬ時がやって来ます。この決定は簡単になされるものではありません。魂は自由気ままな至福に満ちた状態で存在した、全面的な英知の世界を離れて、人間の肉体の物質的・精神的な要求に応じるための準備をしなければならぬのです。

私たちはスピリットの世界に戻ってくる魂が、どれほど疲労しているのかを見ました。二度とこの世に戻りたくないと感じる者も少なくないようです。特に肉体を伴った生の終わりになっても目標に近づくことができなかつたときには。

いったんスピリットの世界に戻ってしまうと、魂は、自己認識と、親しい交わりと、慈愛の世界から離れて、攻撃的で、競争に明け暮れる人間たちがかもしだす先の見えない怖れに満ちた惑星環境へとたとえ一時的にであれ戻っていかねばならないことに不安を覚えます。この世に家族や友人がいても、多くの転生した魂が、個性を奪われた集団のなかで孤独感や無意味さを感じるのです。私の扱ったケースにも見られるように、スピリットの世界ではその反対が真実であり、私たちの魂は恒久的な基盤の上で深く親しい交わりに参加します。私たちの霊的なアイデンティティはたくさんの他の存在によって知られ評価され、彼らのサポートがつかえることはありま

せん。

エネルギーの回復と個人的な自己の評価に他よりも長くかかる者もいますが、最終的に魂は転生のプロセスをはじめるように勧められます。スピリットの世界の環境は去りがたいけれど、一方で魂は、慈しみやノスタルジアさえ憶えながらこの世の生の楽しさを思い出すのです。

前世の傷が癒されて再び自分自身と完全に一体化すると、私たちは自分のアイデンティティの物質的な表現に惹かれるようになります。カウンセラーやグループの仲間たちとのセッションがもたらす協動的、霊的な努力によって、私たちの次の生への準備がととのっていきます。私たちの他の人間に対する過去のカルマや失敗や達成のすべてが、いかにして未来の行いを実り多いものにするかという視点から評価されます。

魂はいまやこのすべての情報を吸収した上で、以下のような三つの基本的な決断に基づき、はっきりとした目的のある行動を起こさなくてはなりません。

- ・自分には新たな肉体を伴う生の準備ができているか？
- ・学習と成長を進めるうえで、特定のどのようなレッスンを受けたらよいか？
- ・目標を達成する最良の機会を得るには、次の生で、どこに行き、だれに宿るべきか？

所属する惑星の人口が多く、たくさんの魂が必要とされていても、年長の魂が転生することは少ないようです。世界が

滅びてしまうと、まだ学習を終えていない存在たちは、自分たちが進めているワークに適した生き物がある、別の世界へと移行していきます。魂の転生の永遠のサイクルは、多くの惑星の世界で進化する宿主の身体の差し迫った必要よりも、個々の魂の内面的な欲求によって決まるようです。

とは言うものの、地球がさらに多くの魂を必要とするようになってきたことも確かです。今日では、世界の人口は五十億人を超えています。この二十万年間に地球上にどれだけの人間が生きてきたのか、人口統計学者たちの計算はまちまちです。概して五百億と見積もられることが多いようです。私は少なすぎると思いますが、この数字はそれだけの数の魂が訪れたことを意味するものではありません。同じ魂が転生を繰り返すこと、一度に二つ以上の肉体に宿ることもありうるということを考慮するべきです。

現在、地球上に暮らす人たちの総数は、これまでここに生きた魂の総数に近いと主張する霊魂再来説の支持者もいます。魂が地上に転生する頻度は一定していません。地球がかつてなかったほど魂を必要としていることは確かです。紀元一世紀の人口は二億人ぐらいいと見積もられています。一八〇〇年には、人口は四倍になって、それからわずか百七十年後には、また四倍に増えました。一九七〇年から二〇一〇年までに、世界の人口はさらに倍増すると予想されています。

ある被験者の転生の履歴を調べたところ、旧石器時代の遊動生活の時代には、一つの転生から次の転生への間隔は数百年から、数千年にさえ及ぶことがわかりました。農業がはじまり家畜を飼うようになった七千年前から五千年前の新石器

時代になると、転生の間隔はもっと短くなっていくと被験者たちは言っています。それでも、一つの人生から次の人生までの間隔は五百年ほどありました。

都市が興り、交易が行われ、食糧が豊富に手に入るようになると、人口の増加につれて魂の転生のスケジュールも早まっていったようです。紀元一〇〇〇年から一五〇〇年頃には、私の被験者たちは平均して二世紀に一度の転生を経験しています。一七〇〇年以降は、これが一世紀に一度になりました。一九〇〇年代に入ると、私の知るケースでは一世紀に一度以上の転生が普通になりました。

魂の転生が増えるように見えるのは、催眠下の人々の記憶力が現世に近づくにつれて鮮明になるからだという主張があります。これはある部分までは真実かもしれませんが、重要な人生ならいつの時代であろうと鮮明に思い出されるはずです。地球上の爆発的な人口増加が、魂がひんぱんにここを訪れるようになったことの本質的な原因であることは疑う余地がありません。では、地球に転生を予定する多くの魂にとって、人口の急激な増加が負担になることはあるのでしょうか。

被験者に転生にそなえうる魂の総数についてたずねると、彼らは魂の蓄えがつきることよりも、地球が人口過剰によって滅びかけていることのほうを心配するべきだと答えます。彼らにはどれほど人口が増えようと、つねに新たな魂がその要求を満たしうるという確信があるようです。私たちの惑星が、この宇宙に存在する知性的な生き物が居住する多くの環境の一つにすぎないとしたら、その魂の総数も天文学的なものになるに違いありません。

少し前に、魂にはいつ、どこで、だれに宿って人生を過ごすのかを選ぶ自由があると仰いました。進歩を加速させようとスピリットの世界にあまり長くともまらない魂がいる一方で、なかなかスピリットの世界を去りたがらない魂もいます。ガイドがこの決定に大きな影響力をもっていることは疑う余地がありません。

死の直後のオリエンテーションの場で、スピリットの世界に迎え入れられるための面接が行われたように、再誕生の準備ができていくかどうかを判断するために、霊的なアドバイザーによって予備的な退出の面接が行われます。以下のケースには、スピリットの世界における、低いレベルの魂の典型的なシーンが描かれています。

死後の世界が教える「人生とはなんのためにあるのか」

マイケル・ニュートン

株式会社ヴォイス